

新鮮足関節外側靭帯損傷の治療 病態からみた今後の課題

熊井 司 (くまいつかさ)

奈良県立医科大学 スポーツ医学講座

足関節捻挫は整形外科外傷の中でも最も頻繁にみられる疾患であり、足関節外側靭帯損傷を呈する割合は約85%にも達するとされている。

新鮮足関節外側靭帯損傷の治療の原則は保存療法である。RICE処置ののち歩行ギプス固定またはfunctional managementが選択される。装具療法と早期運動療法を組み合わせたfunctional managementの満足度は高く、早期のスポーツ復帰が可能であるとする報告が多くアスリートにとってはfirst line treatmentとされている。いずれの方法においても運動療法とproprioceptive trainingによる理学療法的アプローチが重要な鍵となる。

近年、陳旧例に対してsuture anchorを用いた鏡視下Broström法をはじめとする鏡視下修復術や、新しいデバイスによる低侵襲手術も応用されるようになりつつある。以前より、新鮮例で重度不安定性を伴うスポーツ選手に対しては、早期からの修復術も議論されていることから、こういった低侵襲手術を新鮮例に応用することも今後さらに検討されるべきである。

足関節外側靭帯の組織構造を再考し、新鮮足関節外側靭帯損傷に対する今後、期待される治療法について考える。